

# 拙堂會報

発行所  
齋藤拙堂顕彰会  
事務局  
津市大谷町 208-175  
常務理事 中川 禎二  
Tel 059-226-2722

- |               |   |
|---------------|---|
| 齋藤拙堂顕彰会設立趣意書  | 1 |
| 拙堂先生山莊遺址碑     | 2 |
| 齋藤会長津市文化功労賞受賞 | 3 |
| 理事長をお受けして     | 4 |
| 拙堂顕彰吟道大会のお知らせ | 5 |
| 副読本と拙堂先生      | 6 |
| 津藩校有造館と       |   |
| 有造館ゼミナール      | 7 |
| 会員一覧・役員一覧     | 8 |

## 津藩校督学齋藤拙堂の

### 偉業を今に讃へんわれら

歴史上の人物に学び将来を考えることは、私どもにとって大切でありましょう。

私たちが設立しようとする齋藤拙堂顕彰会は、津が誇りとする歴史上の人物齋藤拙堂を顕彰し、その遺訓を学びこの地域の地域振興に役立てようとする団体です。

齋藤拙堂は津藩を天下の文藩といわれるように尽力した文教の功労者ですが、同時に経世家として、また詩人としても江戸後期において大きな業績を

遺しています。

拙堂の文章は第二次大戦以前の中学校漢文教科書には必ず採られていて誰でもその名を知っていました。戦後、日本漢文が学校で教えられなくなつたため、残念ながらこの地域においてすら、その名を知る人は極めてまれになりました。

そこで私達は顕彰会において拙堂の残した作品を現代人にもわかる表現に直し、これを学ぶ機会を作り、更にこれからの世代に向けて拙堂の遺業を伝

える運動を展開しようと考えています。

拙堂の本領とする漢文はグローバル化が進む今日の社会においても日本の文化の根幹として、決してゆるがせにしてよいものではありません。漢文こそは智慧の宝庫であります。

どうか齋藤拙堂顕彰会設立の趣旨にご賛同いただき、ご入会くださいませとともにも絶大なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

齋藤拙堂顕彰会会長 齋藤 正和  
(齋藤拙堂顕彰会設立趣意書から)

## 拙堂先生山荘遺址碑

## 比佐豆知神社内に建立

平成二十八年八月十四日、津市鳥居町の比佐豆知神社の境内に『拙堂先生山荘遺址碑』が建立され、前葉津市長ほか来賓多数のご臨席の中、厳かに除幕式が執り行われました。



拙堂先生がご活躍の時代は他藩の人の城内への出入りが禁じられ、督学屋敷は丸之内にありましたから、他藩からの高名な来客の場合でも、城外の宿泊先に向いて面談されていました。晩年、愛宕山にある比佐豆知神社の隣の茶臼山に、茶磨山荘を設けられ、ここで維新史に名を残す吉田松陰、横井小楠、川井継之助、吉田東洋などのほか、応接に暇がないほど多数の来客と面談しておられます。

明治に入ると参宮鉄道の敷設によって山荘の中央が線路となり、土地建物ともに寸断され齋藤家には僅かな土地しか残されませんでした。その後、昭和の初めに当時の拙堂会で「茶磨山荘遺址碑」建設の発議がなされ、設置場所が線路脇なので車窓から目につくものをとの発想から「拙堂先生山荘遺址」の八文字を高さ三メートルに及ぶ長大な石に彫り、これを建立したのですが、やがて大軌会社（現在の近鉄）の鉄道敷設によって土地が削られ、近

年は立地の関係から除草も困難となりこれを見かねた三重大学の内田前学長のご好意で、平成二十七年三月、この石碑は津市栗真町の同大学キャンパス内に移設されました。

本来の山荘跡地に山荘を偲ぶですがを失い、多くの方が淋しさを感じていたところ、津市吟剣詩舞連盟会長である加藤龍宗当会理事長と、有造館ゼミナールの会長である齋藤正和当会会長のご尽力により、山荘隣地の比佐豆知神社境内に新しい山荘遺址碑が建立されました。

石碑の背面には「齋藤拙堂顕彰会」と刻まれています。顕彰会の発足は同年九月十九日で除幕式が先行していますが、このことについては顕彰会の設立総会で承認されております。

顕彰碑に関する一切の費用は齋藤正和会長のご負担です。当会が齋藤会長から遺址碑の贈与を受け、比佐豆知神社に奉納したという手順であったことを申し添えます。（文責 塚澤正）

# 齋藤会長津市文化功労賞を受賞

## 有造館督学齋藤拙堂の研究と普及活動を高く評価



齋藤正和会長

齋藤正和会長は平成二十八年十一月十八日、平成二十八年年度津市文化功労賞を受賞されました。

この賞は津市の文化振興に寄与し、その業績が顕著であった団体または個人に与えられるもので、会長は会社退職後、大学院に入学して拙堂研究に専念され、その成果に基づき数多くの拙堂著作を復刻出版し、大学での研究論文を著書として出版されました。

また、ご自身が主催される「有造館

ゼミナール」では津藩文教の歴史を中心に生涯学習活動の場を市民に提供し好評の裡に講座を進めておられます。

なお拙堂は「東の良斎、西の拙堂」と併称される文豪でしたが、その安積良斎の子孫・安藤智重氏と福島県郡山市において東日本震災後に対談され、その記録が『対談・東の良斎西の拙堂』として出版されています。

今回の受賞は、先に『齋藤拙堂傳』を出版、近年には拙堂の名著『拙堂文話』の研究成果を『全釈拙堂文話』として出版され、また拙堂の「文集」

「詩集」「月瀬記勝・紀行詩文」「士道要論」「鉄研余滴」「拙堂会報」など多くの著作を復刊し、拙堂関係の著書論文、講演などにより、研究成果を全国に向け発信、「有造館ゼミナール」な

どの講義で「郷土文化」の普及活動を行い、津市の文化振興に寄与しておられることが評価されたものです。

### 経歴

齋藤正和 (さいとう しょうわ)

昭和五年(一九三〇)三重県津市に齋藤拙堂の玄孫として生まれる。

津中学(旧制)八高(旧制一年)を経て新制神戸大学経済学部へ。昭和二十八年卒業。四日市倉庫株式会社(現日本トランスシティ株式会社)入社。社員・役員を歴任し平成十三年退社。

退社後、三重大学大学院、名古屋大学大学院に学び、平成二十四年(二〇一二年)博士(文学)を授与される。

### 主な著作

齋藤拙堂傳 平成五年七月発行

齋藤拙堂物語 三重県良書出版会

全釈拙堂文話 平成十六年十月発行

齋藤正和発行

全釈拙堂文話 平成二十七年七月発行

復刻図書 榊明徳出版社

「月ヶ瀬記勝」ほか多数

# 理事長をお受けして

加藤龍宗

平成二十八年も早や過ぎ去ろうとしています。私にとりまして今年も多忙を極めた年であり、日本吟道学院みえ連合会創立十五年記念大会を始め、数多くの大会を開催しました。特に九月四日の藤貴流扇和会・創流六十周年記念全国大会には津市の偉大な文人齋藤拙堂の詩を構成し吟と舞で『拙堂の心を舞う』の表演を企画しましたところ津市より共催を頂けることとなり、会員一同情熱を込めて稽古を重ね盛会の裡に大会を終えました。またこの間に三重県より文化功労賞を頂戴し多くの吟友たちと美酒に酔ったものでした。

さて、今年になって拙堂の玄孫である齋藤正和様より茶磨山荘址碑を比佐豆知神社境内に建立したい旨のお話を伺い、幸いにも私が当神社の責任役員をしていた関係で快くお受けをし、八

月十四日立派な碑が建立されました。

山荘址碑は旧跡茶磨山荘に隣接するこの地にあつてこそ意味があり拙堂を発信する新しい基点になりました。

拙堂は漢詩だけでも千二百編を残され、当時の吾国を代表する文人であり、国の宝と申しても過言ではないのです。生誕二百二十年の年に当たり、私達吟詠家は申すに及ばず、広く全国に拙堂を伝え、後世に残さなければなりません。このような事情で本会理事長をお受けした次第です。

拙堂会報発刊に臨み、以下に茶磨山荘の詩の中から一詩を紹介します。

『稲荷社のある茶臼山の麓に新しい家を建てた。そこはかつて狐さんが住んでいた。私は王安石(北宋の政治家・詩人・後に南京郊外、鐘山の別荘、半山園を居とした)が争ったようなことはないよ。半分は旧主である狐さんのものだからね』とでも訳しましょうか。故事を含むユーモラスな詩です。

(津市吟剣詩舞道連盟会長)

茶磨山上狐王の祠あり 齋藤拙堂

稲荷山下 新居を下す

新主は『吾れたり 旧主は狐』

吾れ豈に壤を争わんや 王介甫と

半山は『汝に辱し 半山は吾れたり』

加藤龍宗・訳詩

新しき 家を たてたり

昔 狐の住む山に

王安石と 競う 居たり

半山は 汝に辱し 半山は 吾れたり

# 生誕二百二十年記念

## 齋藤拙堂顕彰

### 吟道大会のお知らせ

平成二十九年三月二十六日開催

津センターパレス中央公民館ホール

津市吟剣詩舞道連盟は齋藤拙堂生誕

二百二十年を記念して、平成二十九年

三月二十六日(日)同連盟主催の第一回

齋藤拙堂顕彰吟道大会を開催します。

吟道大会の開催要領は次の通りです。

◎入場は無料・ご来場を歓迎します。

日時 平成二十九年三月二十六日(日)

午後一時から四時半

場所 津市大門七一五

津市センターパレス二階

中央公民館ホール

### 齋藤拙堂顕彰

#### 俳句・短歌の募集

趣旨

拙堂先生の生誕二百二十年を記念し、

左記により俳句・短歌を募集します。

テーマ

齋藤拙堂・有造館・津城・津の街・齋

藤拙堂を取り巻く人々

応募期日

平成二十八年十二月二十五日(日)

応募方法(俳句・短歌)

官製はがき一枚に一作品、未発表の自

作に限りません。住所・氏名・年齢を明

記し左記の事務局へお送り下さい。

選考発表

優秀作品は平成二十九年三月二十六日

(日)の上記吟道大会で表彰します。

選者 俳句 山崎 満世先生

短歌 杉野 茂先生

齋藤拙堂顕彰会事務局

〒514-0007 津市大谷町208-175

常務理事 中川 禎一 ☎059-226-2722

#### 参加要領

各会一〇題まで

吟題は齋藤拙堂・齋藤拙堂にゆかり

のある方の吟。時間の関係で絶句・

短歌・和歌・俳句に限りません。

参加費 一題 五百円

主催 津市吟剣詩舞道連盟

共催 津市

後援 齋藤拙堂顕彰会

申込締切 平成二十八年十二月廿日

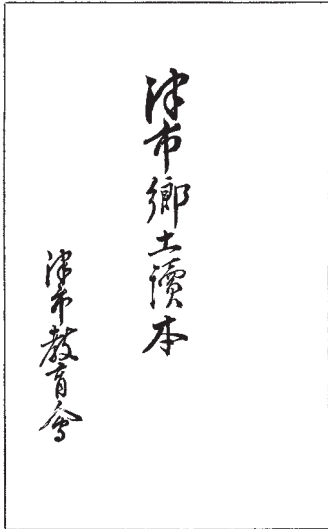
申込先 059-226-2465 津市・米田豊山



# 副読本と拙堂先生

副読本とは主となる教科書にそえて、補助的に用いる学習書を言います。

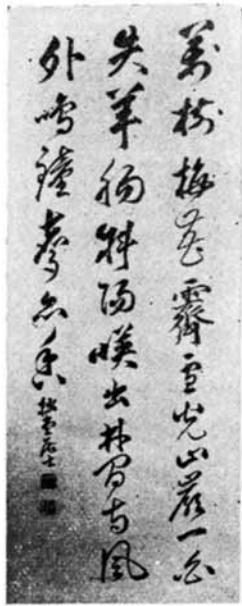
戦前に津市教育会から出されていた副読本には、郷土の偉大な先輩として齋藤拙堂先生が掲載されており、齋藤会長がその原文を入手されましたので一部を紹介いたします。なお、平成十八年出版の津市小学校社会科副読本作成協議会による「わたしたちの津市」には掲載されていません。なお、本年十月津商工会議所発行の「ふるさと読本」には拙堂先生が掲載され、再登場への先駆けとなりました。拙堂先生が再び副読本に登場することを期待して。



## 原文の一部

齋藤拙堂は名を正謙といひ、寛政九年、江戸柳原の津藩邸に生まれた。幼時から學を好み、才氣また衆に勝れてゐたが、長じて昌平校に入り、日夜勉学に努めたので、遂に一家をなすに至つた。其の頃、津藩は藩校を創設して人材の養成に力を致してゐた折柄として拙堂も擢(ぬき)んでられて學職となり津に帰ることになった。

(中略)



蹟筆堂拙藤齋



畫谷青崎宮

先んじ、群議を排して之を施したので、痘瘡

其の後督學に上り、校風の振作、子弟の教育に全力を注いだ。即ち、人材を擧げ、博く書籍を購ひ求め、文庫を増建する外、或いは演武場を設けて武技を練らしめ、或いは才能ある者を選

び、都下に赴かせて洋學・兵學を學ばせる等、學政を督して實績大いに擧がり、津藩校の盛名他藩に喧傳されるに至つた。嘗て將軍家定に謁した時、幕府の儒官に抜擢の内命を受けたが、一身の榮達のために藩を去るに忍びずとし固く辭して受けなかつた。(中略) 我が国に種痘の術が傳はるや、他藩に

(文責塚澤 正)

# 津藩校有造館と

## 有造館ゼミナール

### 津藩校有造館

津市史によれば、津藩校有造館は、名君と呼ばれた藤堂藩第十代藩主藤堂高允（たかさわ）により、教育をもつて士風を刷新し藩風の健全化を図ることを目的とし、藩主自らが生活費を節約して一千両を抛出、のちに初代督学（学長）となる人材、津坂孝綽（東陽）を得て文政三年（一八二〇）三月に開校されたものである。

中でも第三代督学齋藤拙堂の時代に拙堂の人格識見の高さから津藩校の高名は天下に轟き、以後幕末を経て明治四年（一八七二）廃藩によって五十余年の歴史を閉じるまでその校風が維持された。なお「有造」は詩経から採ったもので、有用の人材を育成する目的を明示したものとされている。

津高創立百年記念誌によれば、明治十三年（一八八〇）

一月、県立津中学校が旧有造

館内で開校され、明治十九年

九月、安濃郡古河村の旧津藩

演武壮跡の校舎に新築移転、

その後現在の地（新町三丁目）に再移

転している。有造館の伝統は今なお津

高等学校に引き継がれ、同校の同窓会

では「有造塾」を開講、主として在校

生を対象に、諸先輩の談話を聴く講座

が開かれている。

### 有造館ゼミナール

有造館ゼミナールは、津藩校有造館

の教えを今日に生かすべく平成二十五

年二月、アスト津を運営する「津駅前

都市開発株」と津藩に関係する「藤堂

藩五日会」が共催で開始した生涯教育

であるが、現在では安濃津ガイド会・

ときめき高虎会等の積極的な協力を得

て、齋藤会長を始めゼミナール役員に

より独自に運営されている。講座は藤

堂藩の事績が中心であるが高虎の入府

以前や明治維新前後も対象とし、テーマについては会員の希望を入れながら運営されている。

基本は年間十講座・年会費五千円。

一講座ワンコインということもあって

受講希望者が多い。平成二十八年度は

十四講座を実施中。

会員は年度（四月から翌年三月）更

新で年度の終りに申し込む。

当ゼミナールについての照会は

059-393-1464 齋藤方へ。



有造館ゼミナール講座風景

会員一覧

・平成二十八年十一月廿日現在

団体会員(順不同・敬称略)

伊藤印刷株式会社

岡三証券株式会社津支店

株式会社ZTV

株式会社百五銀行

株式会社百五総合研究所

株式会社百五デイーシーカード

株式会社刀根菓子館

株式会社半泥子廣永窯

株式会社ヘルシーファミリー

公益社団法人日本吟道学院水心会

公益社団法人日本詩吟学院津岳風会

ミフジ株式会社

百五リース株式会社

個人会員(順不同・敬称略)

飯田 俊司 伊藤 鎌造

石野 孝廣 井上 明美

坂谷 ツヤ子 上田 豪

伊藤 歳恭 海老原 初夫

伊藤 誠司 大井 和人

大西 正弘	大平 日出夫	岡 重夫	奥田 則子	勝眞 千代	加藤 龍宗	川合 俊平	河村 ツタ子	木崎 真陽	喜田 恭子	北畠 久子	木下 昇	鯉江 盈	国分 昭男	児玉 進	小林 貴虎	齋藤 正和	下村 尚治	菅野 克也	杉浦 雅和	杉野 茂	高倉 ふじ子	田中 秀人
種田 真山	種田 啓子	塚澤 正	塚澤 洋	寺尾 正紀	富田 陽子	豊田 龍倭	内藤 重芳	中川 禎二	中津 忠夫	中根 利彦	中野 清	中村 昭子	中村 美知子	西川 幾子	西田 きみ子	野崎 耕治	長谷川 和秀	畠山 彦和	秦 周平	林 竹生	林 信吾	深見 和正

役員一覧

福島 弘太郎	藤貴 静扇	淵脇 實博	増田 迪子	松井 幸子	松村 勝順	水谷 忠文	水谷 忠弘	水谷 千春	見並 勤子	宮野 一郎	田矢 修介	福島 弘太郎	藤貴 静扇	淵脇 實博	増田 迪子	松井 幸子	松村 勝順	水谷 忠文	水谷 忠弘	水谷 千春	見並 勤子	宮野 一郎	田矢 修介
村田 文男	村田 文男	森永 敏江	森永 昌雄	山崎 雄三	山崎 龍雄	山本 三千代	横山 清春	米田 豊山	隆 俊夫	渡辺 義彦	中村 安彦	村田 文男	藤貴 静扇	淵脇 實博	増田 迪子	松井 幸子	松村 勝順	水谷 忠文	水谷 忠弘	水谷 千春	見並 勤子	宮野 一郎	田矢 修介

(平成二十八年十一月二十八日現在)